

高校生の職業選好と進路選択

—高校生文化と進路形成の変容・東京調査より—

日本学術振興会特別研究員 荒川 葉

1. はじめに

本報告は、高校生がいかなる職業展望のもとに高卒後の進路を選択しているか、そこに近年の高校教育改革がどのような影響をもたらしているか解明することを目的としている。

かつて、1980年代のトラッキング研究が明らかにしてきたのは、学業達成を基準とした選抜・配分のメカニズムであった。一方で明確な職業威信の序列があり、一方これまた序列を形成している高校・大学のどこに位置付けられるかで、威信の異なる職業に配分されるメカニズムがあった。こうした選抜・配分メカニズムは、生徒に劣等感を与えるものとして批判される一方、スムーズなトランジションを形成してきたともいえる。

しかし、現在、こうした選抜・配分メカニズムも大きく変容している可能性がある。まず第1に高校教育改革の影響がある。周知の通り、高校教育改革は、生徒の「興味・関心」「将来の夢」に基づく進路選択への転換を掲げ、さまざまな個性化・多様化政策を推進している。一方、産業構造も変化している。終身雇用制を保障してきたフォーディズム体制が崩れると同時に、第3次産業の分野でメディア、ファッション、アートを扱う産業が華々しく展開されている。このような状況で、かつてのように、「威信の高い」職業を求めて、学業達成を得ることに対する生徒の意味づけも変化している可能性がある。

本報告は、こうした状況で、School to Workの関係がどのように変化しているのか、それに「将来の夢」に基づく進路選択を推奨する高校教育改革がどのように関わっているのか、試論を提示することを試みる。

2. 調査の概要

対象校…都立高校 18校、国立・私立高校 15校
調査方法…高校2年生対象質問紙調査

なお、本報告は、高校生文化調査研究会（代表 樋田大二郎）実施の調査に基づいている。詳細は、樋田大二郎・岩木秀夫「高校生文化と進路形成の変容・東京調査より」を参照されたい。

3. 高校生の職業観—「どのような職業につけるか」

まず、高校生がどのような職業につけると考え

ているか見ていく。具体的には、「安定感のある仕事につく」「はなやかな仕事につく」「社会的に地位の高い仕事につく」「社会の役に立つ仕事につく」「拘束の少ない、楽な仕事につく」「高い収入を得る」「有名になる」「自分の趣味・好きなことをいかせる仕事につく」「専門的な技能・技術がいかせる仕事につく」の9項目に対し、「きつとできる」「たぶんできる」「やや難しい」「難しい」の4点尺度で答えてもらった。これについて、学校ランク別・性別に見たところ、次の傾向が見られた。

「社会的に地位の高い仕事につく」「社会の役に立つ仕事につく」といった項目では成績上位の高校ほど「できる」と答える傾向が明確に見られた。しかし、「自分の趣味・好きなことをいかせる仕事につく」「有名になる」などの項目については、ほとんどランク差はみられなかった。また「はなやかな仕事につく」「高い収入を得る」については、若干であるが、ランクの逆転現象さえ見られた。このように、業績主義的達成との結びつきが強い項目については、成績下位の生徒は困難と認識する一方、それ以外については成績上位の生徒と同程度、達成可能と認識する傾向が窺えたのである。

4. 高校生の職業選好

それでは高校生は、将来の職業にどのような要素を求めているのだろうか。次に見ていく。指標には上記の9項目のうち、重要とおもわれる順に3つ選んでもらったものを用いた。表1は、そのいずれかで各項目を選んでいる割合を、学校ランク別・性別に、見たものである。

表からはまず、学校ランクに関わらず、「自分の趣味・好きなことをいかせる仕事につく」を重要とする生徒が圧倒的に多いことが窺える。すべてのランクで、65%以上の生徒が重要と答えている。これに「安定感のある仕事につく」「高い収入を得る」が続く。「社会的に地位の高い仕事につく」「有名になる」はいずれのランクでも必ずしも高くなかった。ここからは、自分の「好き」にこだわりつつ、手堅い職業を希望する生徒像が窺える。ただし、これは個々の項目について見た結果である。生徒の職業選好を探るためには、どのような項目をセットにして選ぶ傾向があるのかも見る必要がある。

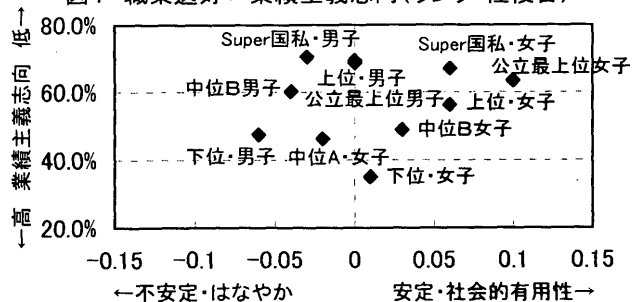
表1 職業選好×学校ランク×性

	Super	上位校	中位A	中位B	下位校	合計
自分の趣味・好きなことをいかにせる仕事につく						
男	70.0%	80.7%	73.7%	72.2%	66.5%	71.5%
女	74.8%	83.3%	86.7%	80.9%	78.9%	81.5%
安定感のある仕事につく						
男	42.8%	50.0%	55.4%	51.2%	54.7%	51.9%
女	50.5%	52.7%	49.0%	58.1%	56.7%	54.8%
社会的に地位の高い仕事につく						
男	16.3%	11.5%	10.4%	8.8%	8.3%	10.5%
女	17.1%	8.5%	6.1%	4.7%	3.2%	5.6%
有名になる						
男	9.5%	10.9%	12.2%	14.3%	15.2%	12.9%
女	3.6%	4.1%	10.0%	8.0%	8.4%	7.8%
「重要」と選んだものの%						

5. 安定性・はなやかさ因子と業績主義的達成

上記の関心から、職業選好を問う質問項目に関して林数量化3類を試みた。その結果、第2軸めに、「安定重視・社会的有用性重視—安定性非重視・はなやか重視」の軸が現れた。この軸は、固有値・相関係数ともに大きな説明力を持っている。各学校ランクの男子生徒、女子生徒がこの軸のどこに位置付くか、まずカテゴリー別平均値をX軸上にプロットした。さらに、その職業選好を持ちながら、業績主義志向はもっているかを見るために、「将来何になりたいかはともかくとして、できるだけいい大学・短大に入っておきたい」に肯定的に答えた生徒の割合をカテゴリー別にY軸上にプロットした。これが、図1である。

図1 職業選好×業績主義志向(ランク・性複合)



まず、図1からは次の傾向が窺える。全体に、女子よりも男子の方が、「不安定・はなやか志向」を持つ傾向が見られる。また、学校ランクで見れば、下位の生徒ほど「不安定・はなやか志向」を持っているといえる。しかも、Super ランクや中位Bランクやの男子は、職業には「不安定・はなやか」志向をもちつつも、業績主義的なルートは確保しておこうという志向性が見られる。

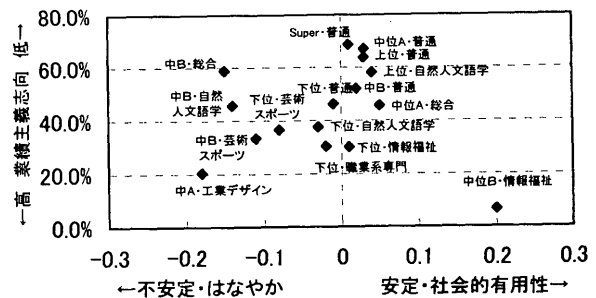
実際の希望職業の自由回答を見ても、Super 校、上位校の男子は、「ジャーナリスト」、「医者」、「研究者」などの職業を志向する傾向が見られた。これに対し、下位校男子には「ゲームクリエイター」「デザイナー」などの職業をあげた生徒が多かった。なお、下位の女子については、「歌手」「メイクアップアーティスト」をあげる生徒も多かったが、反面「介護福祉士」「保育士」等の職業をあげる生徒も多く、このあたりが「安定・社会的有用性志向」の牽引力となっている可能性がある。

このように、「将来の夢」といっても、学校ランクや性差によって質的な違いがあるのである。

6. 職業選好に対する高校教育改革の関与

それでは最後に、高校の個性化・多様化政策が、こうした進路展望にどのように関わっているか見ていく。図2は、先ほどと同様、職業選好第2軸をX軸に、業績主義志向をY軸に取り、そこにコースランク・コースタイプ複合変数をプロットしたものである。

図2 職業選好×業績主義志向(ランク・コースタイプ複合)



図からは次のことが読みとれる。個性化・多様化政策の中で導入された新タイプの学科コースの生徒は、全般に普通科に比べ「不安定・はなやか」志向が強く、業績主義志向が弱い。特に、中位以下の「芸術・スポーツ」「産業デザイン」コースでは、この傾向は顕著である。

コースランク・タイプを独立変数に取り、進路意識や希望進路について見た分析でも、この傾向は見られた。中位以下の非アカデミックタイプの学科・コースの生徒は、威信の高い進路をめざして勉強しようという志向性が他学科・コースに比べて低い。しかも、彼らは悲観的ではなく、むしろ普通科の生徒に比べて、のびのびと楽しく学習する傾向が見られる。しかし、このように、業績主義的なルートからおりて、「はなやか」な職業を求める彼らに、どのような将来が待っているのだろうか。最後にその点を考察して締めくくりたい。

7. 考察

現在、産業構造が変化する中で、確かに中位・会の生徒が志向するような芸術系・ファッション系の産業従事者は増えている。しかし、他の職種従事者に比べ依然として稀少であり、多くはこれらの職業につけないと予測される。そのときに、学歴も職業スキルも持たない彼らは、どこに位置づけられるのか。おそらくこれまで下位校の生徒がついてきた職業以上に、不安定な労働に組み込まれると予測される。「将来の夢」を推奨する高校教育改革の功罪は、こうした点からも考察される必要があるのではないだろうか（詳細は当日配布するレジュメにて）。